

福田博著「世襲政治家がなぜ生まれるのか？ - 元最高裁判所判事は考える - 」

日経 P.B 社 2009年3月23日刊を読む

わが国の将来を待つもの

1. いわゆる Flattening World(平面化する世界、つまりグローバルな経済とか IT 化とかの進行する世界)の時代になると、いろいろな事態に即してすばやく的確に対応することがますます重要になっているのですが、わが国は民主主義体制の国としていつでもそのように対応する統治システムになっているか。
2. それから大規模な景気変動、地域紛争、最近の例でアジアについて言えば、潜在的には、チベット、北朝鮮、台湾などで生ずるいろいろな事態などに対して、すばやくかつ的確な対応ができる体制になっているのか。
3. 新興国がいっぱい出てきているが、世界の中でわが国の位置づけを将来にわたってどういうふうにするか、というようなことをちゃんと政治システムが考えられるようになっているのか。
4. 私は、国内的に見れば、わずか 10 年前には日本は、世界の 2 % の人口で世界の 20 % の GNP を生み出していたとか、そういう過去の栄光に根ざしたナショナリズムともいべきものが、現在、人々の心の中にあるのではないかと思っています。また、最近言われる道州制というのも果たして実現するのか、実現するとしてもどういう形なのかはわかりませんが、いずれにしても結局は、投票価値の不平等を残したままのシステムに移行するのではないか。それが実は隠された目的の一つではないかというのが、私の疑念です。それでは、結局のところ、人為的なデボリューション(地方への権限委譲)を生み出すだけのことになるのではないか。下手をすると、中央集権国家の良いところも地方分権の良いところもない擬似連邦国家ないし半分裂国家の萌芽を秘めてシステムの国になりかねないのではないかと思っています。その最も内層にある原因が、硬直化した選挙区割りを温存しようとする二世、三世の政治家の目指すところではないかと疑うと、なおさらその感を深くします。
5. 哲学者カントの『永久平和論』(1795 年出版)の新訳が最近出たそうですが、永久平和論というのは、210 年前に書かれた論文で、民主主義制は当時は共和制と言われていましたが、民主主義制は永久の平和を実現するためには、とても大事なものであるということが書いてある論文です。私は最高裁判所判事として在職中に、昭和 22(1947)年に発行された、英訳を底本としたこの論文の和訳を最高裁判所の図書館で発見しました。その序文に「この論文に書かれていることは、日本が

将来、平和を愛する民主主義国家として復興するのに役立つのではないかと考え、訳出した」と書かれてあるのを見て、一種の感慨を抱いたことを覚えています。戦争直後でもあり、ドイツ語文の入手が困難であったのかも知れません。

6 . また、ウィンストン・チャーチル(元英国首相。故人)は、

「民主主義はひどい制度だ、しかし他のいかなる制度よりもまだましだ」

ということを行ったといわれております。現在のわが国はどうでしょうか？私は前半については、現在の日本についても当たっていると思いますが、後半については、当たっているのかどうかよくわからない国になりつつあると思っております。以上です。

P82 ~ 84

[コメント]

一票の格差の違憲性について論じた福田判事の勇気ある著書。日本が民主主義国になる第一歩は投票価値の平等にあるとの考えはまさにその通り。

- 2009年9月16日 林明夫記 -